

## 西ドイツ留学の頃

柳田 仁

### プロローグ

一九七五年四月に名古屋学院大学専任講師として採用され、大学院の貧しい学生生活から解放された翌年の夏休み、日本ユースホステル協会主催のヨーロッパホステリングに思いきって参加した。参加申込時に、個人的自由行動の許可願いも届けてあったので、ある時は団体の、ある時は一人でヨーロッパを廻った。

当時は、国際線も羽田空港を使っていたが、その羽田を離陸したのは一九七六年七月一日である。南廻りで香港、バンコク、ニューデリー、クエートを経由して、二〇数時間後には森に囲まれたフランクフルト (Frankfurt a/M) 上空に来ていた。

入国手続を済ませ、空港を出る。バスは西ドイツ特有のすばらしいアウトバーンを軽快に走る。先ず、目についたものは、窓という窓に飾られた花々、新旧の建物の調和した町並である。フランクフルト、ヴュルツブルク (Würzburg)、ケルン (Köln) の中心街、大学、図書館等を廻った後、ケルン発の TEE (国際急行列車) で学生町ハイデルベルク (Heidelberg) へ向う。

午後六時 (夏時間で一時間早めであるので実際は午後五時) を過ぎてもカンカン照り、しばらくネッカー河向岸の木陰で休息してから、有名なカール・テオドル橋を渡り、大学広場に出た。

あの学生王子カール・ハインリッヒとケティとの恋物語『アルトハイデルベルク (Alt Heidelberg)』を思い出しながら古きものと新しきものが入り混った町の中を徘徊する。薄暗い学生酒場あり、メンザと呼ばれる学生食堂あり、書店、みやげ物店等々あり。

日本でも翻訳劇が大正中期頃に初めて上演され、「バンドをつけて、ビールをおおる

われらが幸は、限りもあらず  
季節は五月、人は若者

ハイデルベルクの初夏の宵」

という歌が流行したという。古きよき学生時代の物語である。丘の上の古城を、もう一度眺めてハイデルベルク

を後にする。

シュテュッツガルト (Stuttgart) は谷間の町である。予定していた自動車工場見学は異常な暑さのために休業、中止となる。

シュテュッツガルト大学は宿泊している場所から繁華街を通り過ぎたところにある。閲覧室は開架式と半開架式とがあり、目録コーナーには図書コンサルタントのような係員がおり、いろいろと説明してくれた。閲覧室に入ってから、例の係員が本を探してくれたり、コピーを手伝ってくれたりした。カバンの中身を見せて閲覧室を出る。例の係員氏、図書館の庭まで送ってくれ、「アウフ・ヴィーダーゼーエン」と言いながら握手して別れる。チュービンゲン (Tübingen) は、小じんまりとした赤レンガの建物の多い学生町である。町の中心街からあまり離れていないところに図書館、各学部建物の建物、学生会館等があった。

図書館ではコピーしたいと思うような書物は見あたらなかった。当時留学中の木内氏 (長野出身)、井口氏 (東京出身) も経営・会計関係は北の大学のほうが盛んだと話しておられた。それでも、何冊かの本を大学周辺の書店で手に入れることができた。

西ドイツとスイスの国境は黄線一本だった。スイス入国の頃より天候が悪くなる。それでもこの国らしい湖、

牧場、森、谷間を見ることができた。

バーデン (Baden) からチューリヒ (Zürich) へ。美術館へ行く途中に専門書を取扱う書店があった。美術館ではモネーの「睡蓮」等の大作が印象的であった。そこから市電の線路に沿って高台へ登って行くとチューリヒ大学があった。構内は静かだ。

インターラーケン (Interlaken) は、ユングフラウへの入口にある。グリーンデルヴァルツを経由して登山電車でユングフラウヨッホ三、四〇〇mまで登ったが、車内の半数は日本人で日本語放送もあった。折り悪く、霧雨で白一色の世界、横光利一の『旅愁』にでてくるような氷河を見ることができず残念。両側に草花を見たり、車窓にかすかにアイガーを仰ぎつつ麓へ。その間、ドイツ語の達者な斉藤洋子氏とスイス人ペーター氏が高山植物の名、遠くに見える山々の名を教えてくれたり、登山電車のスベらない構造等に関して説明してくれた。

軽井沢の商店街のようなインターラーケンウエスト駅前を通り抜け、湖と城と教会の美しいチュン市を遠く見てベルン (Bern) へ。ベルン大学は駅の向側の高台にある。前庭には季節の花々がいっぱい植えられている。大学裏手の書店で経営・会計学関係の本を見せてもらう。店員は「自由にどうぞ」と言って中に引っ込む。スイス人は、金銭的にガメツイという噂であるが、一度限りの

外国人でも信用して、監視もせず、自由に見せてくれるのはうれしい。大学図書館は構内ではなく、町の中にある。市立図書館を兼ねていた。傍には教会、みやげ物店等があり、同じような建物で通り過ぎしてしまふようなところにあった。パスポートも名刺も使うことなく簡単に本を見せてくれた。

スイス出国時、持ち合わせのスイスフランがないため、買いそびれた二冊の本を気にしつつ出国する。

スイスとフランスの国境上の検問も簡単だ。我々のバスの運転手が下車して二、三分間話して終りだった。しかし、前の自家用車のイタリア青年組は油をしぼられていたようだ。フランスとイタリアは、案外、仲が悪く、お互に嚴重な時間をかけたチェックをしあっているとガイドさんが話していた。

フランス入国早々、ステンドグラスの美しい、大きな教会で黒人男性と白人女性の幸せそうな結婚式を見る。

パリ大学の理学部と文学部に相当するというソルボンヌ大学に行ってみると、夏期語学講座のようなものが開かれていた。日本人女性を数人見かけたが、一様にすましていた。近くの二、三の書店を覗いたが、会計・経営学関係の棚のところにORの本を見つけただけであった。書店廻りはそれでやめ、ルーブル美術館へモナリザとミロのビーナスを見に行く。

国際列車でブローニュ駅へ行き、それからドーヴァー海峡をフェリーで渡る。イギリス入国の検問は、意外に嚴重。アイルランドとの紛争に原因があるらしい。

日本の汽車のような列車で一路ロンドンへ。もうロンドンに近いというのに、車窓にはのんびりと草を食む綿羊の姿が見られた。ふと大学時代に聴講した西洋経済史の「囲込み運動」を思い出した。

ロンドンの大英博物館には、エジプトのミイラ、ロゼッタ石、マグナカルタ、著名人の自筆等々があり、一日や二日での見学では不充分である。一日目は英国人コニユッシュ氏に駆け足で説明していただき、二日目は一人で重点的に見学した。この図書館で机にへコミができるほど毎日通いつめて勉強したというマルクスの『資本論』も並べられていた。通りの向側にはロンドン大学がある。大学本部前の角の大きな書店へ行ってみた。会計学関係の本棚にはアンソニー、マッツ等のインターナショナル版の文献がはばをきかせていた。イギリス固有の専門書は、あまり見当らなかった。イトトン校の構内に入って教室を覗いたが、教室内は薄暗く、灰色の感じがした。ケンブリッジ大、オックスフォード大に行くだけの時間がなかったのが残念である。

ロンドン・ヒースロー空港を発って、往きと同じく南廻りで三〇時間近く費し、パリ・オルリー、ローマ、ボ

ンベイ、カルカッタ、ラングーン、香港を経由して羽田到着。帰国したら、『アルトハイデルベルク』と横光の『旅愁』をもう一度読み返してみようと機中で思った。

### 留学準備から出発へ

一九八二年三月、当時の勤務先である名古屋学院大学より一年間の海外研修の機会を与えられた。

西ドイツに三カ月以上在住する場合、旅券の他にビザ(査証)も必要となる。このビザの交付を受けるのがたいへんで、旅券を受取ってから大使館・警察署に数回ずつ足を運び、二カ月近くの期間を要する。更に航空券の手配、保険加入、生活用品や書籍類の発送、両替、その他公的私的諸手続等がある。このうち、特に両替については頭を悩まされた。変動相場制により毎日のように円とマルクの交換比率が動いていたからである。

一人分しか支給されない航空運賃及び留学費用で自分と妻の分を少しでもまかなうために、出発日も三月中旬にし、南廻りで安くて安全といわれる航空会社を探した。

三月三〇日午前九時三〇分、定刻通りに飛行機は動き出す。「座席ベルトを付けなさい」「禁煙」のランプを見ているうちにすでに離陸していた。成田国際空港、日本列島は瞬時に雲のかなたに消える。

日本的な段々畑が周囲に点在する台北空港、林立する

ビルに囲まれた香港空港、そして海に囲まれたシンガポール空港で乗換をする。ここからはアブダビ経由でヨーロッパの国々に入るため、成田からシンガポールまでの航路に比し、圧倒的に西洋人が多く、東洋人はいっけに少数派に転落、機内放送からも日本語は消え、たよりになるのは英語放送のみとなる。それにしても、デラックスな食事が、時差の関係もあり何度もあるものだ。キングサーモン、ピフテキ、伊勢エビのグラタンと続き、食欲も減退気味。よく言われるように、出された食事をすべて平らげていたら成人病になりそうだ。

留学先の西ドイツの大学の学期始めまでには充分な時間的余裕もあり、体調もよいので、アテネ (Athens) で飛行機を降り、汽車でドイツに向うことにする。

### アテネ

日本よりも七時間遅れのアテネ空港に着いたのは、翌日の朝、六時三〇分頃である。荷物を受取り、その検査をしてもらい両替を済ませて外に出る。

当時の円の換算率は、四円で一ドラクマ(ギリシアの貨幣単位、Dr.)、得をしたような気がした。空港からホテルまでタクシーに乗ったが、メーターは二〇Dr. ずつ小刻みに動き、目的地についた時は三一九Dr. で、五〇〇Dr. を出すと五〇Dr. のみつり銭として返し、サッと走り去る悪

徳運転手だった。余分に取られてしまったチップを含め、距離からして日本のタクシー料金よりは安い、後味の悪さが残る。

アテネの物価 当時、日本で二〜三万円位のスーツが二、七五〇Dr.、ゆったりとしたツインのバス・トイレ付部屋二、二〇〇Dr.、日本への絵ハガキの切手代一八Dr.、市内通話料金二Dr.、昼食立喰い二六Dr.、ホテルのディナー五〇〇Dr.等。

アテネ大学は市街地にあり、ギリシアならではのすばらしい彫刻と壁画で飾られていた。そのキャンパスには多数の学生が談笑していたが、まだ休暇中のようだ。町の中心のシンタグマ広場には、銀行、観光会社、郵便局、レストランその他種々の店舗がありにぎわっていた。レストランはあまり衛生的には思えない。市内で一番高いリカベスト山に登り、市内を一望すると、アクロポリスの丘のような遺跡が広範囲に点在していた。

アテネから、ギリシア第二の都市テッサロニーキへの夜汽車は賑やかだ。同じ座席ボックスの者同士は、昔からの友人のようにすぐに話はずむ。車内販売でコーラ、レモネード、ビールそれからヨーグルトにおかゆを混ぜたような軽食、さらに串さしのヤキ豚まで売りに来る。この売り声が面白いのでテーブルにとっっていると、前の座席に座っている自称校長という人がトランジスタラジオ

オと間違え、買いたいと言う。また隣のボックスにいた、以前、横須賀の造船会社で働いていたという中年の男性も売ってくれと迫る。

テッサロニーキを一時間以上も遅れて発車、ギリシアとユーゴスラビアとの国境は簡単な検査、ほとんどフリーパス、はじめての社会主義国なので、自由だと聞いていても多少緊張したが、全く心配無用だった。若い検査官が友好的に「日本から来たのですか」と微笑しながら質問し、入国の押印をして旅券を返してくれた。隣のキプロスからユーゴ・スコピエ大学に留学中の青年がいろいろと車窓から見えるものを説明してくれた。広々とした国土、鉄鉱石を埋蔵しているような山々、清流、パブリカ・ブドウ畑、放し飼いのブタ・ヒツジ、たまに工場も見えるが、大自然を十分に満喫したベオグラード (Beograd) への行程であった。

### ベオグラード

斜め後の座席で「ユーゴスラビア」と節をつけ哀愁のある歌を合唱していた学生がいつの間にか下車して我々夫婦だけとなる。駅には名前も発見できず、ベオグラード駅に着いたか否かもはっきりとせず下車する。降りてから何人もに尋ね、ようやく英語の話せる大学生らしき青年に確認してベオグラード到着を知る。ホーム

から駅前に出る途中にインフォメーションと両替所があった。両替所で驚いたことに、日本円の両替はできないという。日本との経済関係が他の自由主義国ほど密接ではないのだろう。仕方なくあまり持合せていないドイツマルクで両替、これは有利だったようだ。車内で同席だった大学生に宿泊代は安いと聞いていたので、インフォメーションでシャワー・トイレ付ツインの部屋を紹介してくれるように頼むと、一、七〇〇ディナール(当時一Din. Ⅱ約七円)以下はないとつれない返事。そんなはずはないと言っても返事は同じ、足で探すことにする。あまり衛生的とは思えない立喰い食堂、レストランが何軒か目についた。ベオグラードホテルを通行人に教えてもらい行く。夜目には堂々たるホテルに見えたので、おそろおそろる値段を聞くと一泊一、五一〇Din.というので宿泊することにする。部屋に入ってみるとジュウタンも少し汚れているBランク程度のホテルであった。

翌日、繁華街から一つ通りを隔てたところにあるベオグラード大学を見学に行く。休暇中のこともあって子供達の遊び場となっていた。アカデミックな建物であるが、市街地の一般の建物と区別しにくい。

繁華街のミハイロバ通りに入る。それにしても軍人が目立つ。チトー大統領亡き後の国を守る意気込みが感じられる。公的な事務所や店で、団結して国を守るシンボ

ルのようにチトー前大統領の写真が掲げてあった。美術館や兵器博物館等のあるカレメグダン公園から見下すドナウ川とサバ川との合流点の眺めはすばらしかった。

当時のベオグラードの物価　メイドインジャパンの六〇分カセットテープ(一卷)二五〇Din.、電気製品は特に高い。バス代(近距離)五Din.、アイスクリーム二〇Din.、レストランのディナー約二〇〇Din.である。

リュブリアナ(Ljubiana)のスローンホテル、BランクだがほとんどAランクに近く、部屋は清潔で広々として、ゆったりと寛げた。ツインで一、二四四Din.は割安に感じた。翌朝、高台のGrad(城跡)に登る途中で、青空市を見つけ、外食では補給できないレタス、ニンジン等を購入する。

道行く人々にジロジロ見られながらこの町を去る。何しろ、日本の外交官の奥さんが、生花教授をしているということだけで、その地方の評判になってしまうお国柄であるから。

車中で会ったアドリア海のホテルで働いているという二人の婦人は、日本人が乗車しているということでわざわざ我々のボックスに座り、日本のこと、日本語ではこの言葉はなんとというかと好奇心強くいろいろと質問し、ノートまでとる。その時、ストローでジュースを吸っていた彼女達が、のみ終るとストローを紙でふいて大切に

しまっていたのが印象的であった。同じボックスにはこの他にイタリアの靴屋さんへ出稼に行っているという二〇歳前後の青年がいて、いろいろと親切にしてくれた。ユーゴスラビアは自由な国だった。入国も出国もパスポートを簡単に見せるだけで済んだ。これからは更に日本人の旅行者も増加することであろう。

今、列車は雪の残る山岳地帯を走りに走りザルツブルク (Salzburg) へ向かっている。

### ザルツブルク

ドイツ語圏に入り、まずは一安心。ディナールの使い残しと円をオーストリア・シリング (当時一〇S 〓 約一五円) と不利な両替をする。両替は控え目にし、夕食はカードの使えるレストランで、「ドナウのさざ波」を聴きながら済ませます。やはり前の二国に比し、こぎれいで、洗練された感じがした。メニューはエビの盛合せ (一九五〇S)、ヒラメ・カニのムニエル (一九〇S) それにトマト、レモンのつけ合せ、パン、オニオンスープ各一ずつで合計四一五〇Sである。宿は『地球の歩き方』で推奨してあった清潔なペンション、風呂・トイレは共用で三〇〇S。

翌朝、モーツァルト広場、ザルツァッハ河畔からホーヘンザルツブルク城を見る。東山魁夷の「馬車よゆっくり

り走れ」のさし絵のようにすばらしい。時間がなく、眺めるだけで通り過ぎるのが残念である。

ザルツブルク駅で出入国手続を済ませ、ドイツ国内へ向かう。ミュンヘン (München) 行き列車、同じボックスの人は「シュューベルト」さん夫妻。ミュンヘン着、乗換え、駅前をホームから見ただけで、フランクフルト經由のドルトムント行きインターシティ急行 (IC) へ、急行料金六マルク (当時一DM 〓 約一〇五円) だった。今、一六時四七分、汽車はヴェルツブルクを通過し、もうフランクフルトまで三〇分のところに来ている。いままでの国々と異なり、車内放送もあり、時間も正確、日本の鉄道に最もよく似ているようだ。

### フランクフルト

この町は二度目であるが、あまり清潔ではないようだ。ゴミ、紙クズ、それに犬の残した「御馳走」まで路面に落ちていた。また駅前通りの向側には堂々として Sex-Shop が店を構えていた。

路面電車で、秋に何度か通う予定のゲート (フランクフルト) 大学に行く。学生達がちらほら、夏学期の時間割もすでに発表されている。

(未完)

(やなぎた・ひとし / 経営学部教授)